

J. D. Salinger の初期の短編について (2)

小林 資 忠

(英米文学研究室)

0. はじめに

前稿¹⁾において、J. D. Salinger の初期の短編の中で、(A) 若者たちをめぐる作品8編のうち4編について、口語英語の特徴を探索しながら、その内容を検討した。本稿では、残りの4編について、同様な手順で登場人物の行動や考え方を考察して見よう。引用の最後の()の中に頁数を示す。

1. “Go See Eddie” について

主人公 Helen がある朝 bathroom から出てくると、寝室はすでにお手伝いの Elsie によって、整理整頓されていた。Helen は兄の Bobby が来ていることを Elsie に知らされたので、急いでガウンを着て、ブラシで髪を整えた。Bobby は Helen に仕事を見つけて、それを知らせに来てくれたのであった。その仕事は Eddie Jackson が新しいショーをやるので、コーラス・ガールとしてそれに出演する仕事であった。Eddie に会いに行くようにという Bobby の説得にもかかわらず、Helen は自分に色目を使う Eddie の所に出かけて行くことに気が進まなかった。Helen は妻のいる Phil と愛人関係にあり、さらに、Hanson Carpenter という青年とも付き合っていた。Bobby が部屋から出ていくと、Helen はすぐに Phil に電話し、彼の妻が Bobby に2人の関係を告げ口したことを嫌みたっぷりに話す。その後すぐに、今度は Hanson に電話をし、何事もなかったかのように、親しげに話し始めるのである。読者は作品の最後で「恋に対する女の鋭敏な本能」²⁾を知ることになる。

1. 1. “Go See Eddie” に見られる口語表現について

次にこの作品の中で、口語英語の特徴を表していると考えられる表現形式について、その顕著なものを探ってみよう。主な登場人物は20台半ばの兄と妹の2人で、気兼ねなく言いたいことを述べ合っている。

1. 1. 1. to 不定詞の to の同化現象

この現象は、Bobby が Helen に Eddie Jackson の頭に白髪が増えてきたことを述べた言葉に見られるが、代名詞 you の音声消失現象にも注意したい。両者とも口語英語の特徴である。

(1) “Eddie Jackson’s going into rehearsals with a new show. I saw him last night.

Y'oughtta see how gray that guy's getting. ..." (121) (= "... You ought to see how gray that guy's getting. ...")

1. 1. 2. 誓言・問投詞・強意表現

次の表現は for God's [heaven's, pity's, goodness(')] sake などと同じ意味を持ち, for Christ's sake から変形したものである。多くの男性と付き合っている Helen に対して, 後生だから, そのような軽はずみな行動は慎むようにと Bobby が忠告しているところである。

(2) He looked out the window again. "Oh, for Chrissake, Helen," he said finally. (123)

Bobby が Helen に述べた言葉の中には, 次のような特徴的な表現が見られるが, これらは後の *Nine Stories* で頻繁に用いられる強意の虚辞表現を形成している。特に親しい間柄では頻度も増し, コミュニケーションを滑らかにする潤滑油の働きをしている。

(3) "I want you to see him [=Eddie]. Put down the goddamn file a minute." (122)

(4) "I want you to go up there. I want you to see Eddie and I want you to take that god damn job." (122)

次の例では強意の度合いが徐々に強くなっていく様子が明らかである。"god damn grand" から比較級の "more god damn grand" になり, それでも Bobby は自分の気持を抑えることができず, さらに最上級の使用によって自分の感情を表明している。

(5) Bobby looked at her. "You and your god damn grand persons. You know more god damn grand persons. The guy from Cleveland. What the hell was his name? Bothwell. Harry Bothwell. And how 'bout that blond kid used to sing at Bill Cassidy's? Two of the goddamndest³⁾ grandest persons you ever met." (123)

話し相手が兄ということもあり, 通例なら使用を控えるこの表現を Helen も兄に同調して次のように気兼ねなく用いている。God が省略されることもある。

(6) "That's a god damn lie, Bob," Helen told him softly. (123)

(7) "Bobby. If you believe that slop it's your own damn fault. ..." (123)

疑問詞を強調する the hell や前置された形容詞を強調する as hell も Bobby によって使用されている。

(8) "... Why the hell don't you leave her dumb husband alone?" (122)

(9) "... What the hell was his name? Bothwell. Harry Bothwell. ..." (123)

(10) "No. Soon. I've been busy as hell lately. Where's my hat? Oh, I didn't have one." (124)

1. 1. 3. or something, and all

この短編では, and all が 1 例, or something が 2 例現れ, 発話をほかしたり, 強調したりするのに用いられている。

(11) He walked directly to the chaise lounge on the other side of the room and stretched himself out, coat and all. (121)

(12) "Didn't you go to hear some girl sing or something?"

"Uh," Bobby affirmed. (121)

否定疑問文のこの発話で or something が使用されているのは, yes の答が期待されているからである。つぎの Helen が発話した疑問文も同様であろう。

(13) “What kind of a spot? Third from the left or something?” (121)

1. 1. 4. 軽蔑語法及び誇張表現

人を低能、まぬけ扱いするために *dope*, *ninny* などがよく使用されるが、この作品では *greasy*,⁴⁾ *dumb* が Bobby によって用いられている。

(14) “I’ll ring up your greasy boy friend’s wife and tell her what’s what.” (122)

(15) “... Why the hell don’t you leave her dumb husband alone?” (122)

さらに、軽蔑感を誇張したり強調するために、次の文では *lousy* が加えられている。

(16) “He’s a greaser. A greasy lousy cheat,” Bobby pronounced. “Two for a lousy dime.”⁵⁾ “That’s your boy friend.” (122) (「彼はいやなやつだ。いやな鼻もちならねえいかさま野郎だ」とボブは言った。…)

また Helen が付き合っている Hanson に卑劣な男を暗示する *dog* を用いて、“You dog.” (124) (「あなたって、いやな [ずるい] 人ね。)」と呼びかけて、からかっている例もある。

1. 1. 5. I mean

この作品では Helen によって 1 回使用されているだけであるが、自分の主張を繰り返すことにより、相手に念押ししているのがわかる。

(17) “Bobby, I love Phil. On my word of honor. I don’t want you to think I’m just playing around. You don’t, do you? I mean you don’t just think I’m playing around, trying to hurt people?” (123)

1. 1. 6. 造語的表現

作者はしばしば造語的表現を駆使するが、時には誤植と見られる場合もある。Helen が使っている “an emery board” (爪やすり) を “an [the] emory board” と記述し、地の文で 3 回も使用している。次の文では、*lush* が他動詞として使用されており、《主に米略式・やや古》で “to make someone drunk” の意から転じて比喩的に用いられたものであろう。Bobby の外観とは対照的に、太陽が当たって、まるでお酒を飲んで血液の循環が良くなったような生氣あふれる Helen の皮膚の様子が描写されている。

(18) The sun was on them both, lushing her milky skin, and doing nothing for Bobby but showing up his dandruff and the pockets under his eyes. (121)

名詞や形容詞が臨時的に動詞として使用された例が Bobby と Helen の発話に 1 例ずつ見られる。

(19) “You used to be such a swell kid,” Bobby stated briefly.

“Oh! And I ain’t no more?” Helen little-girl’d. (123) (「おまえも以前はとてもしい子だったんだがなあ」とボビーはそっけなく言った。「まあ、それじゃ、今は違うの。」とヘレンは小さな女の子の言葉をまねて答えた。)

(20) “I heard two guys talking. You don’t know ’em. They were talking about you. You and this horsey-set guy, Hanson Carpenter. They crummied the thing inside out.” He [=Bobby] paused. “You with him, too, Helen?” (123) (「…連中はうす汚いことをすみからすみまで述べやがった。」…)

2. “A Young Girl in 1941 with No Waist at All” について

主人公 Barbara はまだ18歳の女性で、婚約者 Carl の母 Odenhearn 夫人と船旅に出かけていた。Barbara は船上でレクリエーション係をしていた22歳の Ray Kinsella と知り合い、お互いに身の上話をするまでに親しくなっていく。彼はこの航海が終わったら、砲兵隊の将校になることになっていた。一方、両親がすでに亡くなり、伯母の家に住んでいた Barbara は病気がちだったので、Carl の母が健康のために船旅に誘ってくれたのであった。Barbara はまた船上で偶然知り合った Woodruff 氏から彼の息子が軍隊に入ろうとしていることを知るが、彼の妻はまだ知らなかった。もし知れば1941年は男の子を戦争に駆り立て、女の子や母親を悲しませる本当にいやな年だと嘆き悲しむことになったであろう。

Barbara と Ray はますます親密になり、彼の口からプロポーズの言葉も出てくる。船室に戻った Barbara は、すっかり目が覚めていた Odenhearn 夫人に Carl との結婚を中止したいと言い、まだ誰も結婚したくないという彼女の気持ちを率直に伝える。その後、部屋着とスリッパを身に付けて、甲板に出た彼女は、少女から大人への瞬間を実感しながら、午前4時すぎの静寂に身を浸すのであった。この作品は、Ray が Barbara に求愛することによって、未熟な彼女が女性として目覚め、成長していく過程を微細に描いている。

2. 1. “A Young Girl in 1941 with No Waist at All” に見られる口語表現について

この作品に見られる特徴的な口語表現を探ってみよう。

2. 1. 1. to 不定詞の to の同化現象

Woodruff 夫人が自分たちと一緒に来るようにとスチュワードに話しかけた時に、スチュワードが述べた返事の中にこの表現が使用されている。

(21) “I’m sorry. I hafta meet somebody. Thank you just the same, though.” (292)
(=“I’m sorry. I have to meet somebody. ...”) (292)

次は Ray が Barbara に言った言葉であり、彼は彼女との結婚を強く望んでいるので、繰り返して自分の主張を表明している。

(22) “... In other words, if two people love each other they oughtta stick together. I mean they really oughtta stick together.” (297) (= “... they really ought to stick together.”)

2. 1. 2. 誓言・間投詞・強意表現

Woodruff 夫人は驚きを表す時に、“Dear, God.” を使っているが、Barbara は Ray に対して “Golly” で統一している。この発話は女性がよく用いるもので、“God” の速回し表現である。彼女にとってこの表現は口癖になっているらしく、その後も3回 (p.293, p.294, p.297.) 使用している。

(23) Barbara had to run to keep up with him. “Golly,” she said, “how tall are you anyway?” (223)

一方、Ray は Barbara に対して “Gosh” で対応している。

(24) “Well, I mean, heck. You said it as though you didn’t even *know* me or anything. Gosh. I’ve asked you to marry me about twenty times.” (298)

Ray は強意語 hell の代わりに、その遠回し表現である “heck” を用いて語調を和らげながら、Barbara の他人行儀な言い方を非難し、強意表現 “about twenty times” を付け加えて、彼女に対するプロポーズの意志を明確に表明している。

次の一節は Ray が Barbara に述べた彼の心情であるが、damned, hell の使用により、親近感を込めて相手に近づこうとしている彼の努力が伝わって来る。特に、hell は Barbara の発話 “I don’t know.” を Ray が否定した表現で、その前に 2 回発話されている “you know” を強調したものである。

(25) “We’ll be damned happy. Even if we get in the war I’ll probably never be sent overseas or anything. I’m lucky that way. We’d – we’d have a swell time.” He searched her still face in the moonlight. “Wouldn’t we?” he pleaded.

“I don’t know,” said Barbara.

“Sure you know! Sure you know! I mean, hell. We’re *right* for each other.”

(297)

2. 1. 3. 軽蔑語法

次の一節では、Woodruff 夫人が船に渡された急斜面になった細いはしごを危なっかしく上っている夫に対して、“mouse” と呼びかけている例であるが、この “mouse” には語本来の意味「臆病者」が含意されながら、夫⁶⁾への親愛の情も示されていることがわかる。

(26) Mrs. Woodruff weaved dangerously, then she lifted her skirts and successfully, if inexplicably, made the descent to the rung just above her husband’s seat. She embraced him with a half Nelson

“Oh, my baby,” she said. ...

“But, baby mouse, you were!” ... “Do you love me, mouse?” she asked, ... (298–299)

次のように何度も繰り返された “dumb” は人を軽蔑してあざける意図から徐々に離れ、コミュニケーションを円滑にして、2人の親密度を増す働きをしている。

(27) Barbara made no reply. She bit nervously at the cuticle of her thumb. Finally she spoke. “Do you think I’m dumb?”

“Do I *what*? Do I think you’re dumb? I certainly don’t!”

“I’m considered dumb,” said Barbara slowly. “I am a little dumb, I guess.”

“Now stop that talk. I mean, stop it. You’re not dumb. You’re – smart. Who said you were dumb? That Carl guy?”...

“I wish I weren’t dumb,” she said to the night. (297)

次は若い男性を戦争へと駆り立てる軍隊に憎しみを感じている Woodruff 夫人の言葉である。彼女は予測される戦争に対して米国が準備段階に入った1941を “a rotten year” (296)、あるいは “this crazy year” と言い、最後には “devil” (厄介な [扱いにくい] もの) と軽蔑を込めて述べている。

(28) “... I do hope she [=Barbara] behaves sensibly. Oh, this crazy year. It’s a devil. I pray that child uses her head. Dear God, make all the children use their heads now – You’re making the years so *horrible* now, dear God.” (299)

2. 1. 4. or something, and all とその類例

この作品では余剰表現として、or something が3例、and all が2例、or anything が2例、and stuff が1例見られ、それぞれの話し手が発話をほかしてあいまいにしたり、強調したりするの用に用いている。

(29) "... I'll have my own battery and all ..." (292) [Ray の言葉]

(30) "Hey, I could just take an aspirin or something ..." (222) [Barbara の言葉]

(31) "... Even if we get in the war I'll probably never be sent overseas or anything ..." (297) [Ray の言葉]

(32) "Do you like clams and oysters and stuff?" (295) [Barbara の言葉]

2. 1. 5. I mean と sort of, kind of

I mean は付け足し、念押しのために使用され、他の余剰表現や強調表現と共に起して、強調効果を高めることも多い。また元の意味を失って単なる強意の添え言葉になることもある。

(33) "No, I mean do you still feel a little tight? ..." (296)

(34) "Well, I mean, heck. ..." (298)

(35) "Now stop that talk. I mean, stop it. ..." (297)

Sort of, kind of は動詞や形容詞を修飾して「ちょっと、多少」を意味するが、独立して用いられることもある。

(36) ... she did have kind of a headache, and (222)

(37) "Do you like clams and oysters and stuff?"

Ray started slightly. "Well, yes. Sort of." (295)

2. 1. 6. 造語的表現

次の文の“slucking”は作者の造語または誤植と考えられるが、“surging”, “touching”, “beating”などの意味であろう。

(38) The only sound in the night came from the Havana harbor water slucking gently against the sides of the ship. (222)

3. “A Girl I Knew” について

主人公の John は、1936年の大学1年の学期末に、受講していた5科目の単位を全部落とし、大学から秋になったら他の大学に移るようという勧告を受ける。父と相談し、父の会社に入る前に、ウィーンとパリに行き、外国語を勉強することになった。ウィーンで John は自分が借りているアパートの階下に住んでいる Leah という16歳の少女と友達になり、自分の部屋で、4カ月の間に30数回も彼女とドイツ語と英語で世間話をしたり、彼女の身の上話を聞いたりした。彼女には父が決めたフィアンセがポーランドにいて、17歳になったら、彼と結婚することになっていた。John がパリに出発する日に、彼女はフィアンセの家族の所にいたので、彼は手紙を書き残すことにした。1937年の暮れ、John がアメリカの大学に戻っていた時に、Leah は自分の手紙と彼がウィーンに下宿していた時のアパートの女主人から預かった贈り物のレコードを送ってくれた。Leah は結婚していたが、新しい住所を書いていなかったため、彼は礼状を書くこともなく何カ月もそのままになってしまった。

ヒットラー軍のウィーン侵攻後、John は1940年の夏の終わりに、あるパーティで Leah を知

っているという女性に出会ったが、Leah がウィーンを無事に脱出できたかどうかは分からなかった。その後、彼はある歩兵師団の連隊で情報部の仕事をしていたので、ヨーロッパでの戦争の終結後、軍事上の書類を届けるために、ウィーンに出かけることになった。その町でかつて住んでいた通りにあったタバコ屋や薬局で Leah の消息を聞いてみると、彼女はどうかやらヒットラー軍に殺されたらしいことが明らかになった。John が住んでいたアパートは今は軍の将校たちの宿舎になっており、彼は管理をしている 2 等軍曹に無理に頼み込んで 2 階に上り、彼女が住んでいた階下のバルコニーの付いた部屋を懐かしく見下ろすのであった。感傷的な雰囲気でのこの短編は終るが、この場面は「戦争終結直後の虚脱感」⁷⁾の表明であるのかもしれない。またこの短編では、*Nine Stories* で確立することになる手紙でのやり取りが顔をのぞかしていることにも注目したい。

3. 1. “A girl I knew”に見られる口語表現について

この作品に見られる口語表現の特徴を探ってみよう。特徴的な打ち解けた口語表現は最後に登場する 2 等軍曹の言葉に主に現れている。

3. 1. 1. to 不定詞の to の同化現象

この作品の結末で John と話す 2 等軍曹の発話に “wanna” が 3 回見られる。

(39) “Look, Mac. I don’t wanna sound like a bastard. ...” (259) (= “... I don’t want to sound like a bastard. ...”)

(40) “... Ya wanna hurry up, now. Ya don’t wanna miss any of that goddam moonlight. ...” (259)

3. 1. 2. 誓言・間投詞・強意表現

通例、男性が使用する口語表現 “I don’t give a damn.” の他に、次のような言葉が 2 等軍曹によって用いられている。

(41) “Christ, Mac. I don’t know. It’ll be my ass if you’re caught.” (260)

(42) “Look, Mac. I don’t wanna sound like a bastard.⁸⁾ ...” (259)

さらに、この軍曹は自分の同僚にでも話しかけるように、John に対して “that goddam moonlight” (259) の表現以外に次のような砕けた発話をしている。

(43) He asked me, as I was going out the door, what the hell you were supposed to do with champagne – lay it on its goddam side or stand it up. (260)

“the hell”, “goddam” は両方とも強調のために用いられており、あざけりや軽蔑の含意はない。

3. 1. 3. 軽蔑語法

この作品では、“ass” が《米性俗》の「けつ、尻」の意から比喩に転じて「ひどい目」の意の慣用表現として使用されている。

(44) “... It’ll be my ass if you’re caught.” (260) (「おまえが捕まったら、おれはひどい目に会うんだぜ。」)

3. 1. 4. 副詞 like

この副詞は 2 等軍曹の発話の文尾に 1 例だけ用いられており、「陳述の調子を落とし、言い切りを避ける語法」⁹⁾である。

(45) “... Well, I figured we’d put the orchestra right out on the balcony, like. ...” (259) (「…それで、オーケストラはバルコニーに座させたらと自分は思ったんであり

ますが。…」)

3. 1. 5. or something, and stuff

この作品では、余剰表現として *or something* が2例、*and stuff* が1例だけ使用されている。

(46) In a way, I felt like asking for a crack at summer school or something. (248)

(47) "... Well, I spoke to Major Foltz, and he said the ladies could put their coats and stuff in his room. ..." (259)

(48) "Yeah? What was she, a Jew or something?" (259)

3. 1. 6. 造語的表現

この作品では、ハイフンによっていくつかの語を結びつける手法を用いており、引き締まった簡潔な表現を生み出している。

(49) Certain when-you-get-to-Vienna rules had been laid down before my ship sailed from New York. (249) (船がニューヨークを出発する前に、ウィーンに着いた時にすべき規則が定められていた。)

(50) The two American records were a gift from my landlady - one of those rare, drop-it-and-run gifts that leave the recipient dizzy with gratitude. (251) (…ひょいと置いていった贈り物…)

(51) ..., but I left a note for her, the next-to-last draft of which I still have:... (256) (…清書にとりかかる前の最後の下書き)

(52) Taking this note out of Jack-the-Ripper German, it reads:... (256) (殺人的なひどいドイツ語からこの手紙を翻訳してみると、…)

3. 1. 7. Eye Dialect

Salinger の作品には、"Wuddaya mean, ...?" [= What do you mean, ...?] の表現が多く見られるが、次の発話はこれに類似したものである。

(53) "What were you learning?"

"What did I learn? Uh. *Die*, uh, wuddayacallit. *Die starke* verbs. ..." (253) (= "... uh, whatdoyoucallit. *Die starke* verbs. ..." (「…ああ、何と言ったっけ。強変化動詞だね。…」)

「あの何とか言うもの」の意で "what(-)(d')you(-)call(-)it", "what(-)d'ye(-)call(-)it" としてもよく用いられる。

3. 1. 8. ain't

珍しい表現ではないが、ここでは "am not" の意で使用されている。進行形を用いており、この軍曹にしては、割と丁重に断っている点に注意したい。

(54) "... But I ain't lettin' nobody go upstairs unless they belong there. ..." (259)

(「…しかしこの者でないなら、誰も2階へ上げるわけにゃいかないのさ。…」)

3. 1. 9. account of ...

群前置詞 *on account of* が接続詞として使用されるのは、非標準語法あるいは方言的口語法¹⁰⁾ であるが、次例では *on* も省略され、¹¹⁾ アメリカ口語の *informality* を重視する活力が感じられる。またこの省略には直前に用いられている副詞 *like* の断言を避けた言い方の影響もあるであろう。

(55) "... Well, I figured we'd put the orchestra right out on the balcony, like. Account

of there's only three of 'em. ... Yessir. ..." (259)

4. “Blue Melody” について

1944年の冬、「わたし」は他の兵員と共に、トラックの荷台に乗って Luxembourg City からドイツの Halzhoffen に向かっていた。夜になって、みんなが寝込んだ後、「わたし」は南部なまりのある Rudford という人物から、次のような話を聞くことになる。

Rudford は Tennessee 州の Agersburg という小さな町の出身で、父の影響を受け、11歳でハイスクールの1年生くらいの知識はあった。また少年時代に、特に影響を受けた2人の人物として、彼はピアノ弾きの Black Charles と小さな女の子の Peggy Moore の名を挙げた。Black はあまり清潔とは言えないレストランを経営していたが、彼のピアノの才能は聞く人をみんな熱狂させた。Rudford はピアノを聞きに来る常連の中で一番若いお客であり、もう2年以上の間、毎週2、3回この店に通っていた。そして最近では、彼は Peggy といっしょに Black の所に行くことが一番楽しかった。また時には建築中の建物の高い梁の上に腰かけて、2人の将来の夢を語り合うこともあった。その後で、いつものように Black の所に行くと、その日は彼の妹である Jones 夫人とその子供 Lida Louise Jones が来ていた。Lida は歌がうまく、Rudford と Peggy にそのすばらしさを印象づけた。Lida はクリスマスの週から、約6カ月間、毎晩、Black の店で歌って人気者になり、やがてその土地の名士にもなっていった。彼女は Tennessee 州の大都会 Memphis の有名な「ジャズの大殿堂」でも歌い、スターの道を進み始めたが、Rudford には分からないことが原因で、彼女はまた Agersburg に戻って来た。

Rudford はその年の9月に寄宿学校へ行くことになったので、Black, Lida, Lida の母、Peggy が彼のためにお別れのピクニックをしてくれることになり、Black の古い車で出かけた。ピクニックを楽しんでいる間に、Lida が突然盲腸炎で苦しみ出し、一番近くの Samaritan Hospital に行くが、黒人患者は扱えないと断られる。しかたなく、Jefferson Memorial Hospital に行くが、ここでも彼女を入院させたくない様子なので、さらに Memphis にある病院に急ぐことになる。その病院へ行く途中で Lida はついに死んでしまう。悲嘆に暮れる Rudford が描かれ、彼の「個人的なショックがこの作品に迫力」¹²⁾を与えている。Rudford は翌朝、寄宿学校へ出発し、以後15年間、Peggy に会うこともなくなる。Peggy に再会したのは1942年の初夏、彼がニューヨークでの1年間のインターンを終えて、入隊するのを待っていた時であった。Biltmore Hotel でガールフレンドが来るのを待っていた彼は偶然 Peggy の声を聞き、夫と共にいる彼女に再会する。Peggy は Lida のレコードを聞きたいとは言いが、それ以上に興味もないらしく、Rudford は明日の朝電話すると彼女に約束して別れる。結局、彼は電話をかけずじまいになり、Peggy と会うこともなくなってしまった。Lida のレコードは、彼女の声とは思えないぐらいに、ひどく摩り切れていて、彼も二度とそのレコードを聞くことはなくなる。ただ彼は Lida の死によって体験した人種差別を思い起こし、今は時間の経過により、Lida に対して、以前ほど関心のなくなった Peggy の心変わりを実感するのみであった。

4. 1. “Blue Melody” に見られる口語表現について

この作品に見られる口語表現の特徴を表している表現形式を探ってみよう。黒人の Black や Lida が話す言葉が中心になる。

4. 1. 1. to 不定詞の to の同化現象

この作品では, Rudford, Lida, Peggy の夫の言葉に “wanna”, “gotta”, “gonna” の3種類が現れている。

- (56) “... You wanna meet a friend of mine after school?” (112) (= ... You want to meet a friend of mine after school?) [Rudford の言葉]
- (57) “You’ve gotta get a guy to help us get her in and everything. She’s *dying*.” (118) (=“You’ve got to get a guy to help us get her in and ...”) [Rudford の言葉]
- (58) “It’s her appendix. She’s busted her appendix. Or it’s gonna bust,” Rudford wildly informed Black Charles. “We gotta get her to a *hospital*.” (117) (=“...Or it’s going to bust,” Rudford wildly informed Black Charles. “We got to get her to a *hospital*.”) [Rudford の言葉]

4. 1. 2. 前置詞 of の同化現象

前置詞 of が弱音化して a となり, 前の子音に同化したものである。この作品では2例見られる。

- (59) “That ain’t no song for kiddies.”
 “These here kiddies like that kinda song real good.” (114) (=“... kind of ...”) [Black の言葉] (「この子たちはそういった歌がとても好きなんだよ。」)
- (60) “She say she like this ole boy on accounta the way he stands at the blackboard.” (114) (=“...on account of ...”) [Lida の言葉] (「彼女ったら, 黒板の前に立っている格好がいいから, この子が好きだなんて言ったのよ。」)

4. 1. 3. Eye Dialect

Salinger の作品には視覚方言による綴字がしばしば見られる。Fella (112) [=fellow], gimme (114) [=give me] の他に次のような例がある。

- (61) “I got my sister’s chile [=child] here,” Black Charles said. (114) (「妹の子がここに来てんだよ。」とブラック・チャールズは言った。)
- (62) “... You chillern [=children] can he’p me pull ‘em up,” Black Charles said, and ... (114) (「…あんたら子供がブラインドを上げるのを手伝ってくれてもいいよ。」とブラック・チャールズは言った, そして…)
- (63) “I’m not gonna kiss your old head. Wuddaya [=What do you] think I am?” (114) [Rudford の言葉] (「おまえの頭にキスなんかするもんか。僕を何だと思っているんだ。」)

4. 1. 4. ain’t

この作品では, Black と彼の妹によって “isn’t” の代りに使用されている。この ain’t の用法はいわゆる単純化語法で am not, are not, have not, has not などの代用になるものである。

- (64) “My, my! Ain’t that fine!” Charles said – and meant it. (113)
- (65) “Well, ain’t that glad news!” said the girl, winking at Rudford. (114) [Lida 夫人の言葉] (「まあ, それはすばらしいことね。」とその女はラドフォードにウィンクしながら言った。)
- (66) “That ain’t no song for kiddies.” (114) [Black の言葉] (「それは子供向きの歌じゃないよ。」)

4. 1. 5. 省略語法

省略は口語表現に見られる特徴の一つで、通例、機能語が省略の対象となり、「結果的に内容を際立たせる効果がある。」¹³⁾ この作品では、黒人によって用いられた “y’all” [=you all] (114), “em” [=them] (114), “he’p” [=help] (114), y’self” [=yourself] (114), “gator” [=alligator] (114), “t’night” [=tonight] (115), “here’s” [=here is] (114), “cookin’” [=cooking] などのような語の一部や句として確立した省略の他に、次のような統語的な省略もある。

(a) 動詞 be・助動詞 be の省略

(67) のような進行形の助動詞 be の省略は黒人英語以外にもよく見られる現象であるが、(68) (69) のような完全な動詞 be の省略は黒人英語の大きな特徴と考えてよいであろう。¹⁴⁾

(67) “... and she (is) gonna [=going to] sing for you.” (115) [Black の言葉]

(68) “She (is) a singer, boy. She (is) a singer.” (114) [Black の言葉]

(69) “You smoke too much. You (are) a too-much gal. Sing,” said her uncle. (114) [Black の言葉] (「おまえはタバコを吸い過ぎるよ。おまえは何でもやり過ぎる子だ。さあ歌ってくれ。」と彼女の伯父は言った。)

(b) 助動詞 do・助動詞 did の省略

この現象は珍しくないので、2例のみ挙げる。

(70) She [=Lida] said to Black Charles, “Uncle, (did) you hear what this little ole Margar-reet say [said]?”

“No. What (did) she say?” said Black Charles. (114)

(71) “What key (do) you want it?” (114) [Black の言葉] (「どの音がいいんだい。」)

(c) 助動詞 have の省略

口語英語ではこの現象もしばしば起こる。

(72) “Where (have) you been?” she asked them, and lit one. (115) [Lida の言葉] (「どこに行ってたのよ。」と彼女はタバコに問いかけて、その1本に火をつけた。)

(73) Black Charles stood up. “I (have) got spareribs,” he announced. “Who want some?” (115) [Black の言葉] (ブラック・チャールズは立ち上がった。「豚のあばら骨付き肉があるんだが、誰か食べるかい。」と彼は尋ねた。)

(73) では、三人称単数現在を示す want の語尾 s も省略されていることに注意したい。Lida にも過去の動詞を使うべき所で、次のように現在形のままで済ませて、簡略化している発話がある。

(74) “She say [said] she like [liked] this ole¹⁵⁾ boy on accounta the way he stands at the blackboard.” (114)

次は主語の I も助動詞 have も省略された Lida の言葉である。

(75) “Who cares? Gimme a green one. (I have) Gotta match my shoes.” (114) (「気にしないわ。緑色のものにしてよ。靴の色に合わせなきゃいけないから。」)

4. 1. 6. done et

アメリカ南部の非標準黒人俗語では、done が本動詞と共に使用されて、完了形を表すことがある。例えば、“done did it” は “has done it” の意となる。

(76) “What she et? What she done et?” Mrs. Jones demanded hysterically of her brother.

“Nothing! She done et hardly nothing,” Black Charles answered, miserable.

(117)

最初の発話 “What she et?” では明らかに “she”の後に “done” が省略されている。そして “done” は “has”の意で使用され, “et” が過去分詞の役目を果たしていることが分かる。口語英語では eat の活用変化は次の3通りが通例見られる: eat-ate-ate/ eat-et-et/ eat-eat-eat.

最初の発話は、標準英語にすると、当然, “What has she eaten?” となる。

4. 1. 7. or something, and all とその類例

この作品では、この余剰表現はあまり使用されていない。いくつか例を挙げておく。

(77) “...And when I feel sorry for you or something, you try to get lovey-dovey.”

(114) [Rudford の言葉]

(78) “... Her appendix is busted or something. Hurry, willya?” (118) [Rudford の言葉]

(79) “Abrasion. Blood or anything. There isn’t even any swelling.” (114) [Rudford の言葉]

(80) “... I told him we’d be there and all.” (119) [Peggy の夫の言葉]

4. 1. 8. sort of

この作品では1例だけ用いられている。

(81) “He’s still sort of asleep. Hit him just once, Rudford ...” (113) [Peggy の言葉]

4. 1. 9. 軽蔑語法

子供との対話が中心なので軽蔑的な表現はほとんど使用されていない。ただ、Lida が病院でなかなか診察してもらえないので、ついに Peggy が腹を立てて病院の待合室の中でどなり散らした場面の発話(82)と同じく Peggy が大学生の時に、酔っ払いによって Lida の歌が入ったレコードを壊された時のことを思い出して述べる場面の発話(83)に見られるだけである。

(82) But Peggy stood some ground, for a moment. Shaking violently, she addressed everybody in the reception lobby: “Damn you! Damn you all!” (118)

(83) “I played her records all the time when I was in college. Then some crazy drunk stepped on my ‘Soupy Peggy.’ I cried all night. ...” (119)

4. 1. 10. Him and me was

口語英語では、him は主語、be 動詞の補語としての他に、as, than の後で用いられるのが通例である。この作品では、and で繋がった並記主語として “him and me” が単数扱いで, “he and I” の意で使用されている。

(84) “Him and me was [=He and I were] playin’ mahjong out on the piazza.” (114)
[Lida の言葉]

次の Lida の発話では be 動詞の are が省略されている。

(85) She was looking at Peggy. “You and him sweeties?” she [=Lida] asked her [=Peggy]. (114)

4. 1. 11. 造語的表現

この作品でも、ハイフンによっていくつかの語を結合させた簡潔な表現を作者は生み出している。

(86) Charles scratched his head, swung his immense, stockinged feet to the cigarette-butt-specked floor, and squinted. (113) (...タバコの吸い殻が点々と散らばった床……)

- (87) ... a fighting man with a special gift for writing crisp, quotable little go-to-hell notes to the enemy, invariably when outnumbered or surrounded by the latter.
 (51) (…きびきびした、引用するのによさそうなちょっとした勇ましい通告書を敵に対して書く特殊な技能を持った戦闘士…)
- (88) The gesture, however, had no effect on the noisy, home-for-Christmas crowd, so Peggy turned around in her seat (115) (しかしながら、その身ぶりは騒がしいクリスマス休暇に帰郷した連中には効果がなかった。そこでペギーがいすに座ったままで振り向いて…)
- (89) He got to his feet, a gentle giant of a man, towing a hook-and-ladder gin hang-over. (113) (いかにも穏やかな巨人というふうに、彼は立ち上がったが、はしご酒の二日酔いでふらふらしていた。)
- (90) ... her quitting had something - or everything - to do with the corner-of-Beale-Street incident. (116) (彼女がやめたことは、あのビール・ストリートのかどの事件と何か関係がありそうだったーいやあらゆる関係がありそうだった。)

4. 1. 12. like fun

この表現は、強意の否定詞である“like hell”と同じ「…だなんてとんでもない」の意を表し、文頭に置かれることが多い。

- (91) A rather sneaky announcement followed: “Now we’re engaged.”
 “Like fun we are! ... I’m leaving. I’m going down to old Charles’s.” (114) (かなりずるい言葉が続いて出た：「さあこれで私たち婚約したのよ。」「冗談じゃないぜ。…僕はもう行くよ。チャールズの所に行くんだ。）」

4. 1. 13. this here, these here

標題の語句は、指示代名詞 [形容詞] が不要な here, there を伴って用いられた強調を表す表現である。¹⁶⁾ この作品では、Black の言葉としてしばしば使用されている。

- (92) “How ‘bout you singin’ somethin’ for these here chillern?” Black Charles suggested. (114)
- (93) “These here kiddies like that kinda song real good.” (114)
- (94) “Lida Louise,” he said, “these here’s my friends, Mr. Rudford and Miss Margareet.” He turned to the children. “This here’s my sister’s chile, Miss Lida Louise Jones.” (114)
- (95) “That there Samaritan’s a private horspital,” Black Charles said, grinding his gears. (117)

4. 1. 14. No の強調

口語英語では“no”の強調として、“naa”, “nope” が用いられるが、これらの表現はだらしなく聞こえ、スピーチレベルも低い。¹⁷⁾ この作品では、Rudford の言葉として“naa”が2例使用されている。

- (96) “My head. Rudford, I’m dyin’!”
 “Naa, you’re not.”
 “I am, too. Feel.”
 “I’m not comin’ all the way down just to *feel*.” (114)

(97) Rudford watched her a trifle smugly.

“Naa. You can’t just shove him around and get anywhere. You’ve seen me,” he said. “You gotta really haul off. Get him right under the kidneys. You’ve seen me.” (112)

4. 1. 15. The trouble was,...

標題の表現は文法的には懸垂節 (dangling clause) と考えて良いだろうが、「聞き手の注意を喚起する副詞節の一種」¹⁸⁾ である。

(98) The trouble was, the world might end while his eyes were shut. (117) (困ったことには、目を閉じている間に、この世が終わってしまうのではないかということだった。)

4. 1. 16. 2重否定

口語英語では、2重否定が1つの否定を強調したものであることがよくある。この表現は「今日では、アメリカでも俗語的」¹⁹⁾ と考えられている。

(99) “That ain’t no song for kiddies.” (114) [Black の言葉]

(100) “Nothin’! She done et hardly nothin’,” Black Charles answered, miserable. (117)

(注)

- 1) 小林資忠「J. D. Salinger の初期の短編について (1)」(『愛媛大学教育学部紀要』, 第 II 部 人文・社会科学, 第30巻 第2号, 1997), pp.55-81.
- 2) 繁尾 久・武田勝彦共著『サリンジャーの文学』(文建書房, 1970), p.95.
- 3) goddamndest は goddamnedest の綴りになることもある。
- 4) 1930年代に用いられた“a greasy grind”は greasy を加えることで、軽蔑の意を強調している。
- 5) “Two for a lousy dime” (安っぼい野郎) は “Two for a penny” (英やや略式) と同じ意味で, a dime a dozen (米略式) とも言う。
- 6) Mrs. Woodruff の夫 Fielding の言葉に “punk” が用いられている。
“Me? An old punk like me?” (292) (「僕がかい。僕のような老いぼれた、くだらない人間がかい。」)
- 7) 繁尾 久・武田勝彦, 前掲書, p.79.
- 8) “like a bastard” は “like a madman” と同じく, 「すごく, やたらに」などの意で程度の甚だしいことを表している。
- 9) 藤井健三『アメリカの口語英語 - 庶民英語の研究』(研究社, 1991), p.11.
- 10) 小西友七『英語の前置詞』(大修館書店, 1976), p.257.
- 11) OED の Supplement には接続詞として of が省略された例もある。____ 藤井健三, 前掲書, p.271.
- 12) 渥見昭夫・井上謙治編『サリンジャーの世界』(荒地出版社, 1972), p.170.
- 13) 藤井健三, 前掲書, p.126.
- 14) 次のような疑問文の “Is” の省略は普通に見られるものである。
“(Is) That you, Margar-reet?” (113) [Black の言葉] / “Hey! (Is) That where you put your gum?” (112) [Rudford の言葉]
- 15) “ole” は (米南部方言) で old の意である。
- 16) Cf. 藤井健三, 前掲書, p.230.
- 17) Cf. 小西友七『アメリカ英語の語法』(研究社, 1981), p.177.
- 18) 藤井健三, 前掲書, p.250.
- 19) 藤井健三, 前掲書, p.226.

(2002年5月16日受理)